



さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ

がれきの山ものりこえろ!

－ 桐工被災地ボランティア隊の活躍と成長 －

桐生工業高校の生徒343人（定時制8人を含む）が10班に分かれて、6月9日から7月12日にかけて宮城県岩沼市での被災地ボランティア活動をおこないました。現地では南浜中央病院を主に、お寺や民家の泥掻き、がれき・家財の片付け、側溝の掃除などにあたりました。この活動は、桐生の地元紙「桐生タイムス」でいち早く報道されました。フォーラムもこれに注目し、桐工を訪問。職員2人、生徒4人から話を聞きました。

全校生に参加希望をとって

桐生駅から通称山の手通りを北上すると左手に桐生が岡公園の表示があり、さらにもう少し北上すると右手に桐生工業高校が見えてきます。期末テストも終わり、グラウンドではサッカーやラグビー部員が練習に汗を流していました。



会議室に案内されると緊張した面もちで4人の生徒が待っていました。写真右から建設科1年赤石龍哉君、同小林^{ひろむ}拓夢君、電気科2年増山^{せいと}聖人君、染織デザイン科2年横山^{みお}滯さんです。

職員は右が教務主任の石井先生、左が建設科1年担任の長谷川先生です。

長谷川先生の説明によれば、ボランティア活動のきっかけは、4月当初の豊島卓司校長先生の勧めでした。職員も「やってみようか」と乗り気になり、担任をしている建設科1年の生徒たちに話したところ「やってみよう」ということになったとのこと。その後、石井先生が桐生災害ボランティアセンターと連絡を取り合い、実現に向けて準備をすすめていきました。全校生徒に呼びかけたところ、1年生は全員が希望、定時制の8人を含む344人が希望した



ということです（体調不良で1名が欠席したため343人が参加）。保護者から同意をとり、参加生徒を10班に分け、6月9日（木）第1陣となる建設科1年の37人が宮城県岩沼市（仙台空港近く）に向けて出発しました。

<往路行程>

桐工（6：00） — 太田桐生IC — 白石IC — 岩沼（10：45）

岩沼市近辺でボランティア活動実施（10：45～15：30）

<復路行程>

岩沼（15：30） — 白石IC — 太田桐生IC — 桐工（20：40）



	出発日	クラス	参加生徒数（ ）は女子
1	6/9（木）	建設科1年	37（4）
2	6/10（金）	機械科1年1組	36
3	6/13（月）	機械科1年2組	41
4	6/14（火）	機械科2年1組／電気科2年	34+8（定）
5	6/16（木）	電気科1年	35
6	6/16（木）	染織デザイン科1年	14（13）
7	6/20（月）	建設科2年／染織デザイン科2年	35（15）
8	6/21（火）	機械科2年2組／染織デザイン科2年	34（12）
9	7/11（月）	機械科3年1組／機械科3年2組	38（2）
10	7/12（火）	建設科3年／染織デザイン科3年	31（9）
合計（定）は定時制			335（55）+8（定）



水を含んで重くなったベッドを運び出す

第1陣となった建設科1年の赤石君、小林君に参加の思いを聞きました。

二人とも地震があった3月11日は中学校の卒業式で、家に帰って見た被災地の状況に驚いたと言います。「高校に入ってまもなくボランティア活動の話があったときはビックリしたけど是非行きたいと思った」と動機を語ってくれました。

赤石君は、病院のベッドや機器を運び出す作業をしたが、ベッドは水



を含んでいて重く、翌日は筋肉痛になったそうです。小林君は、「部屋のなかに流れ込んだ泥を掻き出す作業をし、大変だったけれど達成感を味わった。泥は床から平均20～30cmにもなっていた」と話してくれました。



電気科2年の増山君は、電気工事資格の検定試験が近づいていたこともあって、クラスでの希望者は数名だったが、「普段は交流のない定時制の生徒たちと一緒に行動し、会話できたことも収穫だった。作業では、引き出しを開けたら3か月も経っているのに津波で押し寄せた海水が泥水となって入っていて、その凄まじさに驚いた」と言います。

染織デザイン科2年の横山さんは、「参加について最初は家で反対されると思っていたが賛成してくれ、クラス全員が希望した。ただ女子ということもあり、一輪車を使っての力仕事は大変で、さらに泥かきをしていると小さな虫がたくさん出てきて大変だった（笑い）」と言っていました。



津波が残した水溜り
にはカニがいっぱい



津波の“証人”

4人の話を聞いているとそれぞれに充実感が感じられます。相当きつい仕事だったことは間違いありませんが、高校生になり、新しい仲間と一緒にやれたことにも満足感がみられます。横山さんは「現地で見たがれきの山に最初は無理だと思ったけれど、やりきれた時、自分は成長できた」と言っていました。

言葉や文章ではどうしても伝えられないものがあります。それは現地の臭いです。作業中の異臭、特に厨房でのそれはきつかったとそうです。



保護者からも良い企画と好評

親の反応について聞いてみました。いずれも折角の機会だから行ってきなさいと後押しをしてくれたようで、増山君の親は「行け」の一言だったと言っていました（笑い）。石井先生からは「保護者からは良い企画だという声があった。PTAの中にも是非参加したいという声がある、今後も行けなかった生徒や経験者からも希望があれば取り組みたい」と前向きな考えが示されました。

今回の費用は一人3500円のうち1500円をボランティアセンターが、2000円をPTAと同窓会が負担しました。

現地の人から感謝の声が



第1陣で引率した長谷川先生にはプレッシャーもあったように思いました。入学して2か月足らずの生徒たちがどこまでできるのか、相当不安だったようです。その事は赤石君や小林君の言葉のなかにありました。「最初だったのでしっかりやれなかったら学校の名がかかっているので心配だった」と率直に語っていました。

長谷川先生は「現地の人もどこまでやれるのか半信半疑だったかもしれない。でも生徒達は本当によくやってくれた。数の力というべきか、重労働にもかかわらずやりきった」と誇らしく語ってくれました。

ボランティア活動の中心になった南浜中央病院の関係者からは「よくやっている」と誉められ、住民からも「ありがとう」と感謝の言葉が掛けられたといいます。第7陣では、帰りに寄ったコンビニで50本もフランクソーセージの差し入れがあったようで、地元の人たちの心遣いが伝わってきました。

またボランティア活動をしたい

○ 活動中はいろいろな人から「ありがとう」「お疲れさま」と声を掛けられたので嬉しかったです。(溝の泥がなくなってきれいになったとき)とてもやりがいがありました。でも、まだまだわずかしか活動していないので、物足りなさを感じています。私は時間のある限り、またボランティア活動に参加したいと思います。

(機械科1年)



- このボランティアの話が最初にあった時は、行くか行かないかで悩んでいた。だが、豊かな生活をしている自分以外に苦勞している人がいることを考えて、このボランティアに参加した。学校の事前指導で、準備する物の中に「水」という文字が書いてあり、被災地では水を使うのもままならないということに気づいた。実際に、被災にあった病院に行ってみると、津波の跡が残っていたり、あらゆる物が壊れていた。自分は主に四隅の掃除をしたりしていて、「凄いね」などと言われ、自分も気が付かなかったが、人の役に立っているのだと実感した。最初に比べると部屋は綺麗になっており、年内には復興できるかもと聞き、自分は嬉しくなった。ほんの数時間しかいれず、もう少しボランティアをしたいという今までの自分に無かった気持ちが沸き上がった。

(染織デザイン科1年)

- まず率直にこの世の事と思えないくらい現実離れしすぎた光景にただ言葉を失い、この場に居合わせた人々を思うと心が苦しくなります。家や病院、工場、堤防、その全てが津波によって無に変えられたり、大きな傷を負い、機能できない状態にありました。覚悟はしていたけれど、ここまでひどいと自分の無力感を痛感させられ腹が立ちます。でも、現地の人々はすごく前向きで明るく、決して諦めることなく泥の山や大きな流木に立ち向かっていました。そんな姿を見れば、「いつも通り」がいかに大切で、それを維持するのが大変かと強く思いました。いま自分が普通に生きて生活して、勉強できる。これはすごく幸せなんだと感じざるを得ませんでした。こういう強い人たちの力になれて、また知らなければならぬ現実を知ることができて本当にありがたいと思えました。また行きたいと思えました。



(建設科2年)



取材を終えて

東日本大震災による被災状況が新聞やテレビの映像で知らされるたびに、多くの人が「何か自分に出来ることはないか」と語っています。義援金や物資の提供など様々な取り組みが自治体や各種団体等で行われてきました。ボランティア活動も積極的に行われておりマスコミでも紹介されています。しかし、日常の生活に追われる私たちはなかなか現地に出かける決意ができません。桐生工業高校の生徒たちが授業の一環として被災地ボランティアに参加したことには心から敬意を表したい。

桐工を取材して、ボランティア活動の経験が生徒の皆さんの心にとっても大切なものを残したのではないかと感じました。インタビューに応じてくれた4人の生徒の思いも、感想文に寄せられた思いも、現地での行動に裏打ちされています。これはきっと今後の学校生活に良い意味での影響を与えるに違いないと思いました。長谷川先生も「建設科なのでこの状況を見ることが学習につながっている」と言っていました。黒板の前の授業では決して体験できない大きなものを掴んだことと思います。また、石井先生は「生徒がこれほど興味を示して参加してくれるとは思わなかった。純粹に人のためになろうと思って参加してくれる生徒達を誇らしく思う。翌日は平常授業にもかかわらず、遅刻もせずに頑張っている」と目を輝かせて語っていました。

汗が噴き出る暑い日の取材でしたが、生徒たちの熱い思いに清々しさを感じました。被災地でがれきの山を乗り越えたように、これからの生活の中でも大きな困難を乗り越えてください。

私たちに取材の機会を与えてくださった桐工関係者の皆さんに心から御礼申し上げます。

(取材／文責：須田章七郎・武田勝)



おつかれさま！